

川端康成〈掌の小説〉論

—戦前から戦後にかけて—

立命館大学大学院文学研究科
人文学専攻博士課程後期課程
リュウ ブンエン
LIU Wenjuan

本論文は、川端康成が戦前の1934（昭和9）年から戦後の1952（昭和27）年にかけて執筆した〈掌の小説〉10編を研究したものである。

第一章では、「令嬢日記」と「ざくろ」を取り上げる。「令嬢日記」について、不安定な時代と経済不況下にある老会社員の家庭の娘・朝子の生活ぶり及び朝子の視点から見た同窓達の生き方に注目し、現実生活に溶け込めずに時代状況から遊離している朝子の人物像を捉え、暗い時代をいかに生きるのかという作品の主題を明らかにする。「ざくろ」について、主人公きみ子の感性によって支配されているきみ子の内的世界を読み取る。そして作品における母の両義的な役割や、小説の全編を貫いてきた「ざくろの実」の象徴的な意味を考察する。

第二章では、「十七歳」、「小切」を取り上げる。「十七歳」について、妹に焦点を当ててその妹の悲しみの内実を明らかにする。「小切」について、題目である〈小切〉によって照らし出される銃後の現状や主人公美也子の両面を読み取る。そして、大沢中尉との縁談を拒否して個人の小さな幸福を全うしたい美也子の姿を見る。さらに、「新女苑」の入選作と選評を手掛かりに、作者の「小切」に込められている銃後の女性への温情を見出す。

第三章では、「さと」、「水」を対象とする。「さと」について、実家に戻った時に思い出した4年前の嫂の里帰りの情景や現在の嫂の姿から、その変化を感じ取って「はつとした」主人公絹子の内面を分析する。「水」について、〈水〉に対する若い妻の気持ちに仮託して表現された「満州」にいる嫁の郷愁を読み取り、慣れない気候風土に苦勞しつつ「母国」を恋しく思いながらも、夫と「満洲」で暮らしていこうとする強い意志と優しい心を持つ妻の姿を明らかにする。そのうえで、両作品の成立背景を視野に入れながら、当時の戦争状況下の作者の姿勢について考える。

第四章では、戦後の作品「五拾銭銀貨」、「さざん花」と「笹舟」を取り上げる。「五拾銭銀貨」について、特売場の「空気」に釣り込まれ、安い洋傘を買うために内心の葛藤を経て結局諦めるに至った母の心理的過程や、戦後廃墟になった町を目にして人間の営みの本質を味わう芳子の心境の変化を見る。「さざん花」、「笹舟」に関して、それぞれ異なる境遇から戦後に新しい生き方を見出せない主人公の形象から、戦中と戦後の分水嶺で新時代との乖離や敗戦後の喪失感を通して「生」のあり方を問う作者の視点を見出す。

第五章では、「私」、月子の形象に注目し、作品「明月」を「思ひ出」という観点から考察する。作品内並列・交錯している様々な素材の象徴的な意味を把握したうえで、これらの素材がいかに有機的に関連づけられ、月子の思い出の中に存在する「私」の〈不死〉の「生」というテーマに統合されていくのかを明らかにする。

結章では、以上のことを踏まえて戦前から戦後までの〈掌の小説〉群の特質を明らかにし、作者川端の内面を探求する。